

GIRL'S

文風 冴月

チョコレートシフォンみたいだ、と暗い部屋で男は思った。

八畳の部屋はカーテンが重く閉まっている為に、昼間でも暗い。いったいつからカーテンを開けていないのか、男の記憶にはない。天井にまで届く縦長の本棚と、パソコンデスク、そして、数年間使い続けている布団がしわくちゃになって放置されているベッド。部屋の床は雑多なもので溢れ返っていて、カーペットが敷かれていることは、一目見ただけでは分からない。

その床に、シャボン玉が膨らむような柔らかさで、ベッドに背をもたせ掛けて座っている少女がいた。

夜を切り取ったような黒を基調としたゴシックドレスは、スカートに何段ものフリルがついている。純白のレースがあしらわれた袖口からは、小鳥が羽ばたく為に必要な小枝のようにか細い手が覗いている。暗闇に浸かる部屋の中で、一際目を引くのがその手であった。

スカートの裾から飛び出している、投げ出された両足には、黒く輝くエナメルブーツが穿かされている。靴底に汚れが見られないのは、男が少女の為に毎晩磨いていたからだった。ソックスも黒で統一されていて、衣装に沈む少女はまるで、宇宙の果てでぽっかりと口を開けるブラックホールに落ち込んでしまったみたいだった。

男がゴシックドレスの少女に一步近づく。プラスチックが割れる小気味良い音が、男の足元で響くが、木々の間を縫い這う大蛇のように、男は少女だけを見つめてその距離を縮めていく。男の手には白銀に輝く手錠が握られていた。手汗が手錠の表面を滑らせる。男はひどく緊張していた。吐く息も、いつしか荒くなっている。

少女のもとに漸く男が迫り着くと、鋭角に伸びた少女の足を踏まないように気をつけながら、夜にだけ開く花卉のように広がる漆黒のスカートに触れた。手錠の鎖が高い金属音を生む。

目の前で眠っているゴシックドレスの少女を見て、

——チョコレートシフォンみたいだ。

そう男はひとりごちる。灰かに朱の差した頬は、暗がりでも少女特有の瑞々しさを能く表していた。

——久音。

少女——久音は、規則正しい寝息を立てている。森の奥でひっそりと咲く香雪蘭のように、閉じられた睫毛が時折思い出したように揺れる。

うっとり目を閉じて、男は眠る少女の左手を持ち上げる。陶器で出来た栗鼠の置物のように白く儂い薬指は、今にも砂時計が落ちる音と共に零れてしまいそうなほどだ。

男はまず左手に手錠をかける。ついで、右手も同様に。

銀色に瞬く両手を結ぶ鎖。男の強張った指が、少女の左手から右手へと、何度も鎖の上を移動する。さながらサーカスの空中ブランコの危うさをもって。

幾度目かの往復の末、男は目を開く。自然と溜息が漏れた。

ああ、愚かな自分よ。どうして久音にこのようなことを……。男の胸中に浮かんでは消える後悔の念。暗く閉ざされたこの部屋のように、彼の心は薄暗く、沈んでいる。

憧れていた久音を、今こうして自身のものとする事が出来たにも拘らず。

久音は漆黒のドレスに身を包んだまま、依然として深い眠りを旅している。男は彼女の覚醒を待ち侘びている。

「死んでしまうのが、怖い」

砂漠で見つけた休憩所のように柔らかな唇で、ソフィアは言った。

気化した廃液が日の光が遮り、昼間だということにも拘らず辺りは薄暗い。忘れ去られた天を衝くように、高く伸びたビルの合間で、ソフィアは歌うようにそう言ったのだった。

「……如何して」

テンキは帽子についた埃を、丁寧に爪で剥がしながら訊いた。如何してソフィアは死ぬのが怖いのか、テンキには考えても分からなかったのだ。

「だって、いつ死ぬか分からないのだから。こうして話していても、死んでしまうかも知れないわ。息を吸おうとしたその瞬間に、気がつくことも出来ずにぱたりと死んでしまうかも知れないのよ」

「でも、君は死んでいないじゃないか」

我ながら冷たい言葉だとテンキは思った。

街は五十年ほど前に死んだ。

それはテンキが生まれるずっと前のことだったが、人間たちはしぶとく生き続けている。

「それは……『今』は死んでいないわ。でも、この先、一秒先、二秒先、私が生きているという保証は何処にもないじゃない……それが」

怖い。

ソフィアの唇は震えている。嵐が来る前の風見鶏のように。

「そんなの、みんな一緒さ。怖がってなんか、いられない」

そう言ってテンキは歩き出す。道端に揺れる青紫の燐光を湛えた含羞草が、テンキとソフィアを交互に見やり、秘めやかな眠りへと旅立つ。

街は、死んだ。それは唐突だった。宇宙からの未知の電磁波か、はたまた北の帝国によるバイオテロか。科学者は原因を確かめることも出来ずに、ドミノ倒しのように墓場に眠ることになった。

人間の寿命が極端に短くなる。科学者たちの出した、『現象』の齎す人間への影響がそれだった。しかも、どれくらい寿命が縮んでしまったのか、誰も知る術がなかった。

このテロメアの異常短縮によって世界の人口は激減。寿命が極端に縮まなかった者たちでさえ、いつ死ぬか分からない状況に置かれている。

生命の歴史を緋けば、絶滅してしまった生物は数えきれない。けれど、生物全体が減ってしまうことなどなかった。生物は強い。いかに劣悪な環境であろうと、それに適応していく。

五十年。人間たちは世界の人口は一億を切るか、切らないかといったところで止まっている。

後ろをついてくるソフィアに向かってテンキは話し出す。

「いつ死ぬか分からないのは、誰だって同じだ。俺だって、次の瞬間には死んでいるかも知れ

ない。でも、そこで立ち止まって如何する？ 怖いって泣いて、蹲って、如何する？」

晴天の空を溶かしたような薄水色のソフィアの髪が、路地に吹き込む風に弄ばれる。

「それこそ、死だ。人間は、生きることをやめた時に死ぬんだ」

二人は通りへ出た。あちこち塗装の剥げた自動車が、真っ黒の排気ガスを、溜息をつくみたい
に吐き出している。歪んだタイヤが、地面を撫でる。

「でも――」

一陣の風が吹いた刹那、ソフィアは泣きだしそうな表情で、

「人間でない私は……死ぬのが、怖いのに」

そう呟いた。焼け焦げた丘の上に棺を運ぶ、葬儀屋のように濁った風が辺りを包む。テンキは
帽子が飛ばされないように押さえた。

ソフィアは人間を超えた存在だ。容姿は人間そっくりだが、髪の色素はどうてい自然のもの
とは思えないような代物だし、背中には小さな翼のようなものも生えている。

人口が減る中、環境に適応していった為か、はたまたテロメアを異常短縮させた原因そのもの
による為か、人間は新たな形に進化していった。彼らのことを、人間は羨望の念で以って『セカ
ンド』と呼んだ。

セカンドの寿命は長く、事故や病気以外で命を落とした者はまだ出てきていない。最近の研究
では、セカンドの寿命は最低でも百年は超すというものもある。

ソフィアはそれでも、死ぬのが怖いと言うのだった。

「君は分かっている」

テンキの無慈悲な言葉が響く。たつぷりと排気ガスを撒き散らす自動車が通り過ぎる。タイ
ヤが、地面を舐める。風がひとつ吹く。

「ソフィア……」

テンキは知らない。彼の寿命が明日の夕方だということを。

ソフィアは知らない。『セカンド』の寿命が百年よりも更に途方もなく長いということ。

自分がいつ死ぬか分からない二人は、風に包まれている。

我々の意識は、吐息は、知識は、邂逅は、行方は、表情は、想像は、溶けていく。
縄張り争いに負けたライオンのように、薄暗い、太陽が沈みこむ地平線の屋根の下に歪んでいく。

銀箔で作られた手毬で遊ぶ、崖の上の少女がずっと飛び立つ。
水風船を空に浮かべて楽しむ、浴衣の少女が刃物で刺される。
地衣類に覆われた大地を歩く、貧相な少女が飢えに倒れ伏す。
魚と共に歩む人生を決めた、飼育係の少女が水平線に沈んで、
星空に想いを馳せた、金色の涙を流す少女が手首を切って、死ぬ。

我々は溶けていく。沈んでいく。歪んでいく。軋んでいく。消えていく。死んでいく。

月夜の晩の墓守の少女が今日も歌っている。少女は月が沈むのと同時に死ぬ。それを知ってか知らずか、少女は金糸雀の歌声で鎮魂歌を歌っている。

誰も聴く者のいないその歌は、月の沈むまで続く。

少女の死体は群青蝶に変わる。

三日前の嵐が、木々を薙ぎ倒していた。野獣の鋭い牙が咬みついたような、乱暴な裂け目が、倒木の根元に真新しく刻まれている。折れ曲がった傷痕は、雨を吸って暗く捻じれている。まるで内臓を吐瀉したかのように。

倒れた木々が折り重なり、ちょうど粗末な庵となっている場所がある。そこは森の奥深いところで、辺りには動くものなど何もなかった。乾き切っていない枝葉から垂れる水滴が、地面をノックする音だけが不規則に木霊する。

散ったばかりの枯葉が覆い尽くす腐葉土に、少女の死体が仰向けに横たわっている。

飛行機が墜落した日の空のような薄い青のワンピースからは、少女のほっそりとした白い手足が伸びている。石膏像の白さに似た、無機質さがそこにはあり、羽ばたくように広げられた両腕は、水平線に消えた帆船を連想させる。

カーテンから覗く朝日のような、白い額。力なく閉じられた瞼。礼儀正しく伸びた睫毛。雨に濡れた黒髪が貼りつく左頬。なだらかな鼻梁。澄ました印象を受ける唇。柔らかく丸みを帯びた顎。ほっそりとした首筋は乱れた髪に溺れ、その隙間から照れ隠しする子供のように、細い鎖骨が覗いている。

少女は殺された。

世界で最も愛していた人に。

そうして、この森の深奥に捨てられた。

ゆっくりと少女の身体は、自然に還る。伸びることのなくなった手の爪が、刹那、深青に輝きを放つ。

百科事典のページを捲るように、少女の指先から手のひら、手首、肘、と順に異形のものへと変質していく。

それは――群青蝶、と呼ばれる、魂の屑である。

呪縛から解放された群青蝶は、ひとときの安寧を揺蕩い、再びの輪廻へと舞い戻る為の旅に出る。

生い茂る暗い木々の間を舞い抜け、飛び立っていく。ひらひらと、魂の溜息にも似た振動を重ねて。

蝶たちは、枯れ落ち損なっている葉を愛撫して、そこに絡みつく雨蜜を食む。

やがて森が群青で埋め尽くされる頃、蒼穹を溶かし込んだようにも見える燐光を湛えながら蝶たちは消えていく。霞に舞い溶けていく。

再び、森は闇に閉ざされる。

おもちゃ箱に蓋をするみたいに、群青蝶たちの遊泳は幕を閉じた。

狂舞の後に残されたのは、少女の空色のワンピースだけ。

新たな生を受けた持ち主が、自分を探しに来ることを、ひっそりと願っている。

静寂――。

音符で出来た世界で漂う赤いワンピースの少女が、プールの中でイルカと戯れる妖精のように、何にも縛られずに歌っている。ふわふわと旋律が揺れて、五線譜の呼吸が溢れて。目を瞑った少女の黒髪は音楽記号に弄ばれるように舞い、か細い指先にひとつの世界が降り積もる。

本を閉じる音が聞こえて、ほうっと一息つく彼女の、ほっそりとした手が目の前に差し出される。

「次の、頂戴」

ちょうど傍にあったノディエの短編集を、彼女の掌に載せてあげる。薄い文庫本だけれど、その質感に満足したように手が引っ込む。

大きめのビーズクッションに、両側から挟むように彼女と寄りかかって本を読む。それが僕の休日の過ごし方だ。ベージュ色のクッションはどこか地味な気もしたけれど、部屋に持ち帰ってみるとすんなりと他の家具に溶け込んでくれた。

彼女は本を読むスピードが速い。速読というやつだ。三百ページくらいであれば三十分もあれば読んでしまう。

部屋に降るのは時計が時を数える無機質な音だけで、僕は時折不安になる。

その不安を振り切るように、開いたままの本に視線を戻す。けれど、内容は頭に入ってこない。僕はそれこそ一般的な読書スピードよりも遅い部類だろう。本を一冊読み終えるのだって一週間はかかる。

彼女とは、違う。

それが、僕にはたまらなく怖い。

こうして二人して部屋の真ん中でクッションに寄り掛かって本を読むのは嫌いではないけれど、彼女との間に広がりゆく時間の開きに取り残されてしまうのが、怖いのだ。

彼女を見やると、すでに三分の一は読んでしまっている。肩にかかるくらいの黒髪が、窓からの陽光に照らされて、ひどく綺麗だった。ノディエの描く幻想的風景に、彼女はいったい何を思っているのだろうか。

本を読むことも、人の気持ちを読むことも、僕には難しく、恐ろしく時間のかかることなのだ。

よく、人生はひとつの物語で――、なんてアナロジーを耳にすることがある。彼女は自分の人生さえもぱらぱらと、僕が追いつけない速さで読み終えてしまうのではないか。どれだけ僕が彼女と一緒にいることを願っても、ページをめくるスピードは加速度的に増えて行って――。

「ねえ」

思考を破るように、彼女の声が響いた。小さな部屋だから、驚くくらい大きな声に聞こえることがある。

「どうしたの」

久しぶりに声を出したから、おかしなふうに聴こえはしないか不安だった。ひとつ咳をする。そこで気がつく。彼女の薄い唇が、少し、震えていた。

「わたしといて、楽しい？」

不安げな瞳で僕を見てくる。人差し指を本の上に挟んであるのが、彼女らしくて微笑ましかった。つい笑ってしまう。

「な、なんで笑うの」

「ごめん、なんでもないよ。でも、どうしていきなりそんなことを訊くの」

「それは――」

いったん口ごもって、

「だって、あまりお話できないし、ずっと、本、読んでばっかだし、わたし」

きっと彼女は怖かったんだ。どうすれば良いのか分からなくて、でも本を読むことしかできなくて。

僕だってそうだ。怖かった。いつのまにか二人して読書に耽る日々が始まったけれど、干渉しなければ傷つくことはない、無意識のうちに逃げていたんだ。

「ごめん」

どうして謝るの、と彼女は訊いてくる。それこそ心の底から、分からないといった具合に。

「今度、おすすめの本、教えてよ」

それが僕の精一杯。彼女に少しだけ近づくための言葉。

本は読み始めたらいつか終わりが来る。

それは人生だって、恋だって、同じことだ。

始まってしまったら、その長さに関わらず、きっといつか終わってしまう。

「君は急ぎすぎなんだ。もう少しゆっくりと前に進んだって良いと思うんだよ」

こうして会話をしていれば、彼女は本を読めない。僕らの恋は終わりに近づかない。

なるべく中身のあるものになりますように。

願わくは、終わることのないように。

彼女は頷いて、微笑んだ。